

脳損傷後の「主体性」の回復をどう支援することができるか

主体性研究委員会 能智正博

第1回 研究の経緯と方法について

この連載記事は、上記のタイトルに則して主体性研究委員会のここ数年の成果を述べるものです。今回は初回ということで、このタイトルに関わる研究が行われたことの背景となる経緯とその方法や手続きについて、簡単に述べておきたいと思います。

「主体性」への問い

脳損傷を受けた方のリハビリテーションにおいて、その予後に影響する要因の一つがご本人の「主体性」であると考えられています（長谷川，2019）。「主体性」は、教育現場などでもよく聞く言葉ですが、どういう意味でしょうか。辞書で引くと、広辞苑では「主体的であること。また、そういう態度や性格であること」と書かれています。では「主体的」とはどういうことかと言えば、「ある活動や思考などをなす時、その主体となって働きかけるさま。他のものによって導かれるのではなく、自己の純粋な立場において行うさま。」とありました。

しかし辞書の定義はあくまで一般的なものであり、具体的な現場において、どういう活動や思考に対して「主体的」と感じ、どういう人に対して「主体性」があるかと考えると、なかなかすっきりとした答えが思い浮かぶわけではありません。この辞書的定義にしても、「主体となって働きかける」の「主体となる」とはどういうことでしょうか。「自己の純粋な立場」などというものはどこにあるのでしょうか。「他のものによって導かれていない」ことはどうすればわかるのでしょうか。

学術的な文献でも、「主体性」という言葉はいろいろな意味をもち、一筋縄ではいかないことが指摘されてきました。たとえば伊藤・秋元（2015）によれば「主体性」という日本語と対応する英語の単語は複数あって、そこには independence, subjectivity, autonomy, individuality, self-direction といった語が含まれており、どの語が使われるかは文脈によって違っているとのこと。それだけ「主体性」の意味が幅広いことがわかるでしょう。であるとしたら、脳損傷者のリハビリテーションの現場という、まさに独特の文脈のなかでは、「主体性」はどういう意味で使われているのかを明確にしなければ、脳損傷を受けた方の「主体性」を回復させたり高めたりすることは難しいことがお分かりになるでしょう。

主体性研究委員会の立ち上げと活動

そうした「主体性」への問いを背景として、本学会の主体性研究委員会は立ち上げられました。脳損傷者の「主体性」とはどういう特徴をもち、どういうふうに変化していくのか、また、それが実際脳損傷者の予後に影響を与えるものであるとしたら、それをどのように促進していけばいいのか。そういった疑問に答えるために、2015 年、本学会内に長谷川幹理事長の発案で委員が集められて、活動が始まったのです。委員には、脳損傷の当事者とそのご家族、リハビリ医療に携わる医師、療法士、看護師、通所事業の支援員、そして、研究者(心理学、哲学、社会学)など、多様な立場の方々が含まれていました。

この委員会ではまず、脳損傷者の「主体性」の特徴づけを行うという目的で、約 20 名の委員が定期的に集まり、グループでのディスカッションを行いました。そこでは、それぞれの委員の具体的な体験が共有され、自由な意見交換が行われました。そこで得られた語りは録音され、その後文字に起こされた上で質的な分析が行われました。質的な分析では、語られた内容を性急に既存のカテゴリーで分類したり数量化したりするのではなく、語りに含まれている様々なエピソードやアイデアをボトムアップで整理し、関係づけていきました。

そこで抽出された内容がとりあえずまとめられましたのが、和田・長谷川（2018）になります。この論文では、「主体性」を「障害のある人の回復につながる主体性」と限定した上で、それを意欲、自分次第という考え、自信の 3 要素から成るものと結論づけました。意欲は結果の期待を伴うもので、自分次第という考えは自己責任の自覚であり、自信は自己効力感の高まりと関係しています。これらの要素を支えるのが病前から変化した自己に関する認知でありそれを評価する価値観ということになります。まだまだ細かいところで曖昧さは残っていますが、今後の研究の土台としてはわかりやすい枠組みが呈示されたように思われます。

主体性研究委員会の活動の展開

次に本委員会が取り組んだのが、上記の結果をもとに「主体性」を簡便に測定することができる質問票を作成することでした。和田・長谷川（2018）の示した主体性の特徴づけをそのまま質問項目にすることは難しく思われたので、「主体性」を評価する行動的な指標を委員会の議論からとり出し、質問項目の候補を作成しました。その候補をさらに委員会の全体会議で議論して質問票の試用版を作成し、脳損傷の当事者 50 名ほどに試行すると同時に、その内容と試行結果を 2021 年にいくつかの学会で発表しました（例えば、長谷川・小林・能智・藤田・増田，2021）。ただ、この検査キットを用いてより多くの当事者から幅広くデータ収集を行う計画はコロナ禍の影響で延期を余儀なくされ、ようやく 2024 年に再開したところです。

と言って、コロナ禍で本委員会の活動が完全に停滞していたわけではありません。私たちは定期的にオンラインで会合を開催し、「主体性」を高めるために医療専門職がどのような実践を行っており、脳損傷の当事者がそこでどのような体験をしているのか探索する活動を継続しました。会合は、委員全体に呼びかけて行われる全体会と、議論のとりまとめを行うワーキング・グループ会合が交互に行われました。参加者数は委員会開始当初ほど多くありませんでしたが、その回数は2024年5月までに10回を超えています。

以下に五十音で、このテーマの議論に参加して下さった委員の方々のお名前を列挙させていただきます（*はワーキング・グループに入っていた／入っているメンバーになります）。

磯貝政博・香苗、小川彰*、川上亮子、川邊循、木村奈緒子、後藤博*、
小林隆司*、白波瀬元道、中島鈴美、長谷川幸子、長谷川幹*、藤井か
代子、藤田真樹*、細田満和子*、増田司*

今回、連載という形でお示しするのは、「主体性」を高めるために医療専門職が行ってきた様々な工夫をまとめたものです。主にリハビリテーションを提供する側の声を中心にありますが、リハビリテーションを受ける脳損傷当事者の方々の体験も参考にさせていただいています。執筆は、会合の取りまとめ役を務めさせていただいております、東京大学大学院教育学研究科の能智が中心に行いますが、その内容は、主体性研究委員会の委員の方々、とりわけ、ワーキング・グループのメンバーとして議論に参加して下さった方々のアイデアや議論に基づくものです。

研究の方法

ここで今回、「脳損傷者の主体性の回復の支援」というテーマでデータの収集と分析を行った際の研究方法について、簡単に説明しておきたいと思います。使われているのは、大きく言えば「質的研究法」という手法です（能智，2011）。研究と言えば、実験やサーベイ型の調査を行って、数量的な結果を統計的に分析するという方法を思い浮かべる人も多いでしょう。確かに、科学的な研究ではそうした量的研究は現在でも中心的に使われており、自然科学のみならず社会科学の諸領域においても、仮説を立てて量的データを収集して分析するというのが、伝統的に重視されてきました。

ただ、ここ30年ほどの間で、そうした量的な研究アプローチで見落とされてしまうものや、なかなか数量ではとらえきれないものを探索し、まずは言葉として仮説的に取り出してみようという研究手法が広がってきました。そこでは、インタビューで語られた言葉や自然な日常場面での言動が対象になり、意味の解釈を積み重ねながらそのデータに含まれる内容の特徴をまとめていきます。こうした研究の総称が「質的研究」ということになります。一般的には、「データの収集や分析や結果の報告において、数量とい

う形式に頼るのではなく、言語的な表現を重視する研究法」と説明されています(能智, 2011)。

より具体的には、上でも書きましたように、脳損傷者リハビリテーションの現場の関係者の皆様から、どんな経験をされているのかを言葉として聞き取るところから始め、そこから共通の特徴を拾っていきました。語られた言葉を文字にして、意味のまとまりごとにそこで何が語られているかを解釈したあと、類似したものをグループ化していくような作業を続けました。

結果的に抽出されたのは、次のようなまとまりです。

- ・気持ちの安定をはかる／見守る
- ・視線を自分から外へ向かわせる
- ・他の脳損傷者の間に誘う
- ・主体性を育む環境を整える
- ・専門職と脳損傷者の関係を再考する
- ・主体性を育む準備をする
- ・言葉による働きかけを行う
- ・主体的行動に伴走する

以下の報告では、必ずしもこの順番になるとは限りませんが、次回からこのまとまりを基本としつつ、主体性を育む様々な働きかけの工夫をまとめていきたいと思っています。

【引用文献】

長谷川幹（2019）高次脳機能障害者の回復は主体性がカギ．高次脳機能研究，39(2)，203-207．

長谷川幹・小林隆司・能智正博・藤田真樹・増田司（2020）脳損傷者の〈主体性〉に関する研究（Ⅰ）——質問票の開発 日本リハビリテーション医学会第5回秋季大会、神戸／オンライン

伊藤真理・秋元典子（2015）看護学領域における主体性の概念分析．日本クリティカルケア看護学会誌，11(3)，1-10．

能智正博（2011）臨床心理学をまなぶ 6：質的研究法．東京大学出版会．

和田真一・長谷川幹（2018）障害のある在宅脳損傷患者の長期的な回復につながる主体性の概念．対人援助学研究，7，71-78．